

う少し展開し、家隆が新古今の撰者として、他の歌人たちの秋歌に對しての評価をみることによつて、より一層、家隆の秋歌の素材の好みと傾向を知ろうとした。又、西行と人麿の秋歌を好んだことから、兩者と家隆との歌の類似を見、家隆の歌風を探つてみた。

第三章は、前章の例の後半を受け、「家隆の歌風と作家態度」と題し、定家の歌風に、少し触れ、兩者を比較しつゝ、また本歌取りの姿勢から、家隆の歌風と作歌態度を論じた。そして、後鳥羽院御口伝の「たけもあり、心もめづらしく見ゆ」の批評のように、清澄平明な中に深くこもる感動の詠歌に、家隆の作家態度と歌風とを私なりにみいだそうとした。

## 〈作品論『門』〉

### 第三回卒業 塚本 育子

『門』は『三四郎』、『それから』とともに通常三部作と呼ばれている。『門』執筆当時の漱石の健康状態はあまり良いものではなかつた。直後に修善寺の大患がひかえていたのである。小宮豊隆著『漱石の芸術』にあるように、『門』という題名は、小宮豊隆、森田草平の二人が偶然見付けた字をそれにあてるといふ特殊な形でつけられた。(第一章『門』の執筆背景)

『それから』の代助と三千代、『門』の宗助と御米を比較すると、愛の必然性によつて結ばれたという点で共通している。宗助と御米夫婦は、決して裕福ではないが、「一つの有機体」となる程深く結ばれている。それは社会が彼らに背を向けた結果に他ならな

い。この夫婦は十四章であきらかにされるような過去を持つが、六年の年月がたった今は平穩にくらしている。しかしまた一方では、この年月の間に、この夫婦の間にも変化がおきてくる。一つは御米と易者のことであり、一つは宗助と参禅である。これらにおいて二人は互の愛を信頼することができなくなる。御米は病氣を契機として宗助への信頼をとりもどせるが、宗助は不安を抱いたまま『門』は終るのである。(第二章宗助と御米)

この夫婦の変化、宗助の不安はどこから来るのか、これに関して「罪の意識」という点からみる学者が多い。たしかに彼らの罪意識は過去においてあつたかもしれないが、現在の彼らにとってそれは時間の彼方に押しやつたことなのである。参禅にまで到つた宗助の心にあるものは、逃避を求めぬ心、何とかしてからりとした気持になりたいたいという心であろう。「恋愛の自由」という点からみれば宗助と御米は決して罪を犯してはいない。罪人のように疎外したのは周囲であり、罪はむしろ周囲にあるといえる。三千代も御米も、信頼すべきものと耐える勇氣と覚悟を持った「恐れない女」であつた。しかし代助がとらわれた物質上の不安よりもっと深い不安を宗助は抱いている。『門』には、これに関してそれ以上の追求はなされてないが、これが『門』の最後にあらわれている暗さである。(第三章罪の意識について)

自分の分別をたよりに生きてきた宗助に、禅の門が開かれるわけはなかつた。分別とはとりもなおさず自己なのであるが、宗助の悩みの本質は自己そのものにあるのだから、これからのがれることができるはずはない。漱石は知性に重きを置く人であり、鋭い知性を持ったが故の悲劇は『行人』にも『心』にもあらわれている。宗助

の参禅も、そこからの脆皮をはからうとする漱石の一断面を反映しているようである。(第四章参禅)

『門』の参禅前後の芸術的欠陥に関しては、諸氏が、漱石の健康状態、職業意識、題名の制約、『それから』の続篇を書くという束縛などをあげているが、これは宗助の悩みの本質が自己そのものにある、それに関して漱石が根本的に追求していないことから来るようである。(第五章『門』の芸術的欠陥について)

最後に、小六と坂井についてふれてみた。小六は宗助の昔を、坂井は御米との事件がなかった場合の宗助の未来を暗示しているように思われる。(第六章 小六と坂井について)

昭和四十七年十一月二十五日

## △金峯山の伝説―役行者

にまつわる伝説を中心として―▽

——金峯山への憧れ——

第三回卒業 福井 るり子

金峯山は、奈良県の南部、吉野山から大峯山にかけての一連の峰つづきの総称である。古くから、この山には慰めや救いを求めて入っていく人が後を絶たなかったという。例えば『万葉集』には、  
三吉野之 耳我嶺尔 時無曾 雪者落家留 間無曾 雨者零計  
類 曾雪乃 時無如其雨乃 間無如 隈毛不落 念乍叔来 其  
山道乎

と詠まれているし、『枕草子』や『源氏物語』からは「御嶽精進」と称する金峯登山が当時かなり一般化されていたことが窺われる。

また近年では三島由紀夫氏が、「追われたら吉野の山へ逃げよう」等と生前友人に話しておられたと聞いた。その伝統は現在も生きているのだろうか。要するに、金峯山は人々の一種の憧れの地であった。そしてその觀念からいつか一つの宗教―修験道が出来上るに至ったのである。私はこれらの金峯山の特異性が各時代の文化と結びついて作り出された伝説を卒業論文のテーマに選んでみた。まず金峯山が幸せの浄土を思わせる地であるという信念ができて「金の御嶽伝説」が作られ、更に修験道が盛んになると、その開祖、役小角をはじめ高名な験者にまつわる伝説が数多く生まれていったのである。

その中で私が最も心惹かれた「役行者と一言主神の話」を紹介したい。これは『今昔物語』他数書に載せられており、また謡曲の『葛城』としても伝え継がれている。役行者が金峯と葛城の間に石橋をかけることを葛城の守護神、一言主神に申し付けたところ、彼らは自分の姿の醜さを恥じて夜々に隠れてこの橋を作らうとした。行者にはそれが気に障り一言主を叱責するが、尚も反抗した為、行者は彼を谷底に呪縛してしまったという。

この話は役小角の威勢を示そうとする創作である。しかし宗教的な知識の乏しい私には何ともほのぼのとしたものをまず覚えてしまうのである。今、吉野山に立ってみると葛城山は間近に感じられ、私もここに橋をかけてみたくなる。幾万本の桜が雲のように咲き連なっているのを眺めるとそれはあたかも白い石の橋のようである。ああ私の祖先はこれを見てあの話を作ったのだらうと思うと苦笑しうなづいてあげたくなるのである。こんな思いは他の全ての伝説にも共通して言えることである。これらを思い起こすとき、庶民の